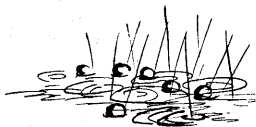


”

# 白

# 然

“



## 第十一回 幼稚園教育実際指導研究会協議会

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

か  
ら

ちちちちちちちちちち

△太田次郎講師▽

幼児の世界では、動物や植物を人間にかえて考えることが多いように思われます。

これは科学性の面から考えると、のぞましくないということになります。しかし私は、幼児の場合にはむしろ科学的に考えず、擬人的・童話的に考えた方が楽しくてよいのではないか、と思うのです。

科学性の芽生えを培うということは、よほど慎重に考える必要があると思います。

あまりに科学的なことを教えると、いわゆる子どもらしさが失われてしまうのではないかと、とおそれるのです。知識のつめこみは考えなければなりません。私はあまり科学性ということにこだわらない方がいいのではないかと思います。しかしこれは、動植物を愛すること、自然を観察すること、をしないということではありません。おとなのもっているイメージで考えないで、子どもの世界、たとえばそれが科学とはかけはなれていることがあっても、それはそれでいいでしょう。飼育にしても、幼児が自分でやれるということを考えなければならぬと思います。例えば、水栽培のこと。これはよく行なわれていますが、たいへんむずかしいものです。いつもこれを子どもに

やらせると、子どもは「植物は水で育つ」と考えるのではないでしょうか。水栽培で成長するのは特殊な例です。これが科学的によいのは、根の発育がみえるからであります。だが、根の発育をみるにしても、なんなに管理のむずかしいことをしなくてもよいと思うのです。とにかく私には、水栽培は、よい教材とは思われません。

天体の観察や、お天気しらべについて。これについては、「忍耐力を養う」ということが言われますが、忍耐力を養うことのためには理科などの教材が使われたのではあまりよくないと思います。

幼稚園の「自然」という場合、「科学的」ということを、あまりに細かく考えない方がいいのではないのでしょうか。これを将来

の科学的な考えに結びつけるとしたら、私はむしろ、自然を観察させることより、物理的なことを教えた方がいいのではないかと思うのです。植物の名前をたくさん覚えたりするけれど、あれは、切手の収集と同じようなものです。物理的といっても、むずかしいことはありません。ものをつくる、ということはたいへんよい経験です。

また、子どもにもっと喜んでものを作らせる、ということさせたらどうでしょう。美しいでき上りのものを作るのではなく、とにかく喜んでつくることです。積木、砂場、その他いろいろな材料はごろごろあります。磁石、てこ、かつ車なども、もっと利用することです。そして、へたでも、また、たとえばでき上らなくても、道具を使ってみて、くふうさせるところに意義があるとは考えます。

これは、絵画製作なども結びつくことです。小さな頃から、科学者を育てようという教えることより、日常生活の中で少しずつ考えさせることの方が役にたち

ます。

一しょに動植物を観に出かけ、その絵を描かせるのもいいが、いちいち科学的に正しいとか否とかではなくてよいでしょう。

私は、幼児の科学性に関する事例研究が少ないように思うので、今後、こうした研究をしていくべきだと思っております。

(お茶の水女子大学生物学助教授)

#### △掘合文字講師▽

日頃子どもと接しているなかで感じていること、していることを話したいと思えます。

子どもの生活は、言うまでもなく毎日毎日遊びの連続です。ままごとで木の葉を集めてくる、砂場でダンゴやダムをつくる、積木を高く積んだり、汽車ごっこをする、音楽に合わせて動物を表現する などなど、こういう幼児の生活は、すべて自然に関するものになっているのではないかと私は思います。こういう生活が重なり合って「自然」へ結びついていくのが、自然の幼児の生活ではないかとも思われるのです。

指導する立場としては、「自然」を経験

させるために、「自然」の材料を用意しなければならぬと考えます。が、私は、子どもの生活である遊びがそのまま発展するよう、先生が子どもと一しょに生活することが、「自然」の指導になるのではないかと思っております。一しょに葉っぱをちぎる、砂場で遊ぶのも結構です。そのためには、環境が整っていることがたいせつになってまいります。先生によっては、動物を飼ったり、植物を栽培したり、あれもこれもと考えるのですが、子どもの園では、その点は貧弱です。

しかし、子どもの方からもってくるオタマジヤクシその他の報告はたいせつにしています。

飼っている動物はモルモット、小鳥などぐらい。種をまくのに、いちいち先生が説明していつせいにまかせたりしていません。種まきよりもっと楽しい汽車ごっこなどをしている子どもがあるとすれば、その子までも無理に種まきをさせたりはいたし

ません。先生が種をまくとき子どもが興味をもつてくれば、話し合いをしながらやらせてみたりします。園によっては種の発芽から成長の過程などを絵にかいておく例もあります。私の組では、これは考えておられません。

幸い恵まれた環境をもっておりますのでつき山やたくさんの立木や広い庭などは十分利用したいと思っております。その他は十分にそろえてしまうと、幼児に工夫力・考察力がおこらないのではないかと気がもするのです、いたれりつくせりということはないで、というふうな気持ちです。

先日こんな例がありました。ナワトビの紐をコードにして、手にぎるところはソケットのつもり、それで「電気」で電車を動かそうとしていたのです。

子どもは幼稚園以外でいろいろ知識を得てきます。それについて全部説明の必要があるわけではないのですが、先生の方でも、もっとそういうことについて研究しておくことがたいせつではないか、と思います。

子どもと一しよに、何かをいっしょうけんめい考えてあげること、それがその子の将来に意味をもつてくることがあるかもしれないと考えます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)

#### △坂元彦太郎講師▽

„自然“ということばのなかみは、実に多義的です。例えば、ルソーの「エミール」の中で使われている「自然」ということばは、十一種類あると言っている学者もいます。このことばは、使っている人、使うときによっていろいろありますが、幼児教育でふつう言われるときには、二つのことが含まれていると思います。即ち (1)は自然界。大自然というふうなものに関係したことを言うとき。(2)は、自然科学。いわゆる科学、科学的法則的なことばの意味があります。自然に親しむということば、前者であり、科学性を養う、科学的な思考の目を養う(小学校の理科教育にあたる)ことを考えているのは後者です。

自然に親しむこと、動物を愛護すること

は、それが科学性を養うことにつながるかどうかと、それ自体、豊かな人間性をつかうために非常に意義のあることです。小学校では動物の愛護は道徳の中にあり、それにあたるものです。

科学性、合理性をつちかうということの方を考えると、太田氏のはなしの如く子どもなりの考え方を認めること、そしてむしろ物理的な方をやる、ということになります。幼児には幼児らしい合理的な考え方があつてよい。が、子どもはやはり本来、童話的な考え方をするもので、これが大部分小学校までつづきます。子どもが自然の生活の中で、自然に合理的な考え方をもってくるのはいいが、むりやりに科学的な考え方を伸ばそうとするのは無理なはず。しかし例えば、電気のソケットにぬれた手でさわらない、など子どもの現実生活につながる合理性は必要です。また、童話的世界をもちながら暗やみを恐れるなどという子には、自分で懐中電灯をつけさせてそれをなおしていく、というようなことは

生活のどこかにあっという間と思えます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園長)

### △ 討 議 ▽

**A** 「幼児の遊びの中で、自然をとりあげるということに関係して。青虫をもってきた場合には、どこにいたの、どんなところに、などきいたり一しよにそこに見に行ったりしてあげますが、カマキリの発生などを観察しているようなとき、どの程度指導したらよいでしょうか」

**太田** 「そのとき子どもがどう思っているかによってきまってくるのではないかと、私は思います。将来の科学的知識のために何日かえる、などいうのもいいが、その中で観察の眼が養われてくるとすれば、よいと思います」

**A** 「蝶の発生に興味をもって先生に教えにきてくれることもありました。要は、子どもが喜んでやっていたらよいというわけですね」

**太田** 「小さい子は著しい変化に興味をも

ちます。さきあまり教えこまなければいいことだと思います」

**B** 「『科学性のめばえ』ということについて」

**太田** 「『科学性』というのは、将来の自然科学的な体系を理解することに基いたものです。私はある時期には、基礎的な科学的な思考体系を教えねばならないが、しかしそれは幼児期ではないと思います。

幼児の場合は、科学的法則に合っているといまいと、論理的にものを考えようとする、工夫するということが、将来に直接結びつかなくても「めばえ」として役に立つのではないのでしょうか」

**C** 「『子どもの夢をのばすのはたいせつ』ということですが、これをいじ悪くうけると、指導者のない、ほっぽっておくということにならないですか。子どもの行動の中に、ここにはめばえがあると分析できる先生でないかと思えますが……」

種をまくとき「せんせい、ここにはお父さん豆と、お母さん豆とあるんですね」とい

うのですが」

**太田** 「『科学性』という場合、自然科学の論理」ということを言わなくてもよい。子どもを放っておくということでもなく、う

まく子どもの注意をひき、指導するのはよいことです。例えば、いま私が幼稚園の先生をしていて子どもの生活を全部知っていても、私の自然科学の知識の体系を子どもに教えようとしたら、とてもむずかしくてできません。観察の眼を養うような指導はもちろんいいが、ただ、これと将来の自然科学と直接に結びつくとは言えないですね」

**D** 「これはどうしたのか、という疑問を持たせるように子どもを導いていくということと考えるともよいでしょうか。美しいな↓どうしてかしら、ふしぎだな↓きいてみよう↓ためしてごらんなさい、というように順序だてていくというのは？」

**太田** 「それは私は、科学であると思えます」

**D** 「合理的にものを考えるということでは

この本は、他の本とは異なる現代的な意義をもつ。この本は、人間の初期の発達を中心に、理論的研究と実践的活動のどちらをも深め、推進するのに役立つ特性を備えている。

内容は、一五章にわかれている。児童観の変遷・発達と人格形成・胎児の行動

守屋光雄著

## 「発達心理学」

発達・胎教・新生児の発達・乳児の発達・保育問題・言語の発達・描画の発達と診断・思考の発達・遊びの発達・親子関係と人間形成・問題児の人格・発達検査―知能検査。

著者の優れた前著「乳幼児心理学入門」(白井書房、昭二六)および「幼稚

園児)(金子書房、昭三〇)に次ぐこの本には、その間に著者がたゆまず続けた研究と実践の成果が、取りいれられていて、幅広く重厚さを増し、その底を著者の生活原理が流れている。それが、他の研究者・保育者の業績を尊重することと共存するものであることを知って、

読者たちは、

書

評

この本を貫ぬ

く生活原理へ

の親しさを感じ

じるのではない

だろうか。

松村康平

著者は、この本を「中間的専門書」の類と、その序で述べている。これを、研究「即」実践、実践「即」研究の立場から筆者がとらえるとき、この本は、実践的価値の高い専門書であるといえる。

(朝倉書店、A5四二〇ページ、

1000円)

すが」

坂元 「合理的にものを考えるといっても根本的には、お父さんの芽」というようなものに通じる考えにもとづいた合理性、これはほんものではない。部分的に科学性でも、そのまま将来の科学性とは違い、やがて時期がきて変っていくもの、これを区別することを太田氏は述べられたと思います。私は科学性ということばを使うと使うまいと、それ以前にたいせつなことがあるからそれを指導していきべきだと思えます。なぜだろう、どうしてだろう、と思わない子もいます。それをすべての子に思わせるようにするのがいいのか? レディネスのある子とない子といるのであって、童話的な考え方の中にいる子があってもいいのではないかと思うのですが……」

E 「レディネスのない子にそれをもたせるのには、どうしたらよいでしょうか」  
坂元 「どうして? という疑問をもつのは、一つは発達でもあるが、一つはま

た環境でもあります。質問ができるようになって、その答を科学的に理解できるようになるのは、もっと後の時期ではないかと思えます。

一つは、その子がしたいこと、熱中できること、全体的な身心の発達をうながすようなことをさせるのがいいと思えます。直接聞くようにしなさいなどというのではなく、レディネスができているか否かは、実際わからないのですから。

もう一つは、なにも幼稚園のときに科学的な思考をつくらなくても、上の段階でそれをするのもできるではないか、という議論があります。全部の子どもが幼稚園期にそうならなくてもよいと思えます。もう少し大きくなったときに環境が正しく普通に備わっていれば、できるようにもなるのではないでしょうか」

**F** 「太田氏が、水栽培が適切でないと言われたが、適当な面も考え合せてプラス・マイナスの適・不適について？」

**太田** 「プラス・マイナスで、マイナスが

少し大きいのではないかという意味です。何といっても植物は光がたいせつです。プラス面では、根がみえること、せまいところでも成長が早いこと。マイナス面では、特殊例が一般化される危険があるのではないかということです。

水栽培は、管理がだいぶむずかしいと思えます。あれほどのものをとりあげなくても、もっといいものがあるのではないか、という気持です」

**G** 「お天気しらべについて？」

**太田** 「私の子どもの経験では、日記などに毎日書きこむわけですね。今日は晴、その翌日はくもり、この機械的な記録は、子ども自身、あまり興味をもっていないのではないでしょうか。これがかえって、天気に対する興味を失うことになるかもしれないと思えます」

**坂元** 「私どものところでは夏休みにしてもありますが、お母さんにしていただいております。母親に、子どものことに関心をもってもらうのに、就寝と起床だけより、天気

をつけるのもまた悪くなくろう、というつもりで。ただこれがそのまま、科学的な思考に結びつくとはいえません」

**H** 「夏休みには、忍耐力を養う、学校のことを忘れないように、ということも考えたり、梅雨の頃には、雨が多いことを知らせるために季節的なものとしてお天気しらべをとりあげておりますけれど」

**太田** 「機械的に天気を調べて記入するのは意味がないと思えます。天気しらべをするなどというのはありません。ただ機械的に記入するのではおもしろくない、という意味です。子どももっている生活と結びつけて、天気というものを理解させるような仕方で行っていただけら、と思えます」

**I** 「現在の子どもはいろいろと変わってきています。疑問をもたせようとしても、表面的に簡単に解決してケロッとしています。例えば『雨が降って水はどうなるでしょう』『地面を通って、下水を流れて、川から海へいく』といったぐあいです」

**太田** 「その通り。これは都会の子ども

もそうだが、われわれおとなもそうです。実際に観察させることが、考えさせるのに役にたつのではないでしょうか。頭の中で考えさせる質問のとき、そのようになりやすいと思われれます」

**坂元** 「そういう理解は、よい・わるいは別で、事実、それが科学的な思考をもつ子どもになるかならないかは別問題です。そういう子どもには、何か別に、その子が一しようけんめいできるようなことをさせてやったりするのもよいでしょうね」

**J** 「梅雨期は、必ずしも雨が多いことにはなりません。私の組では、雨が多いか少ないか、*“あてっこ”*をしました。それが子どもの興味をもたせることになりました」

**K** 「子どもはお天気しらべより、あてっこに興味をもってしまいます。子どもの自然認識ができなくなってしまうので、ケース・スタディをすすめるのがよいと思います」

**L** 「テレビ・ラジオ・絵などの視聴覚材

を、科学性に使うことについては？ 直接子どもの体験がたいせつではないかと思われませんが……」

**坂元** 「その通り。何でもぶつかって自分で体験するのはたしかにたいせつです。スライドでは、本当にみたことにならないのもたしかです。しかし、視聴覚の教材それ自体、また意味があることもあります。視聴覚材は補助教材であります。うつつたものと現実との区別をいつのまにか考えるようになったりするのでもいいことです。た

しかに自然科学の中心には、直接体験があるわけですが、スライドをみるのが意味がないということでもないですね」

**M** 「子どもの経験の中で考えさせていくということに関して、話しをさせることと絵をかくことについては？」

**太田** 「絵をかく方がむずかしいのではないか、と思えるのですが……」

**N** 「私たちの経験では、絵をかくことが多いので、子どもが要求します」

**坂元** 「子どもが思っていることを表現す

る、ということについては、ほんとうに思っていることを表現できるだろうか、ことばと思っていることが、どの程度一致しているかを、いつでも考えておかなければならないでしょう。絵をかく、ということについては、描いた絵でその子の思っていることをすべて判断してもいけないでしょう。判断の手がかりとはなりませんけれど。絵でまとめることによって科学性を養うことができるというように単純にはいかないものです」

**N** 「観察とか認識の結果として絵をみるわけではないが、絵をかくことが多いのです」

**坂元** 「子どもが描いた一本の線をみて、その子の考えていることをうまくよみとれることのできる先生ならそれでいいでしょう。水栽培やお天気しらべを、言われたからすぐやめる、というふうにとられるのはわれわれの良さでもあり弱さでもありません。柔軟な態度を養っていくことが私どもにたいせつなことと思います」 \* \* \*